一月

パストラール尼崎

No127.2022(R４)年１２月25日
〔編集・発行〕
パストラール尼崎
尼崎市潮江１丁目１０-２
Tel. 06-6493-0521
Fax.06-6493-0301
発行責任者：峰田　康弘

◆一月の歳時記◆

伝統芸能になった『歌舞伎』

日本の伝統芸能の代表格『歌舞伎』。恐る恐る観に行くと何やら高価そうな着物を着たご婦人や見惚れてしまうほどの舞妓さん（芸妓さん？）達がチラホラ・・・。内容を熟知し、場馴れした観客の中で借りてきたネコになりつつも、舞台の美しさや役者さんの演技に魅了され、その非日常に満足して帰るのですが、この４００年も続く『歌舞伎』、その歴史を辿ると、時代の流れに上手く乗りながら生き残ってきた当時の役者たちのしたたかさが垣間見えるのです。

『歌舞伎』の祖は、出雲の阿国（女性）ですが、当時としては完全なはみだし者。派手な衣装で踊ったり色物を演じたりする姿は、大衆からおおいに支持されます。（今なら臍出し、臍ピアスで踊り狂うパフォーマーか、それ以上だった可能性も。汗）その人気もあって他にも「遊女歌舞伎」なども出現します。それは風紀の乱れにも繋がり江戸幕府はついに女性が舞台に上がる事を禁じます。それならと今度は、女性の役を青年が演じる「若衆歌舞伎」が出現。「女形」の始まりです。しかしこれも「男色」の風習があった当時、風紀の乱れとなり禁止されました。この事から見た目と色っぽさ重視の女形から演技や内容重視の歌舞伎に移行していくのです。

しかし歌舞伎界最大の危機「絵島生島事件」が勃発。大奥の「絵島」が禁止されていた二枚目俳優「生島新五郎」の芝居を観に行き門限を破ってしまうという例の事件です。この時、歌舞伎をよく思っていなかった幕府は絵島を信州に幽閉。生島は三宅島へ流罪。大奥、歌舞伎関係者１５００人もが処分を受けました。また「天保の改革」でも歌舞伎は「芝居の内容がみだらで風紀を乱している」とされ、役者には旅行の禁止や外出時の編笠の強制などのほか、芝居小屋も辺ぴな浅草に移転させられます。

それでも『歌舞伎』は、美貌の８代目市川團十郎の活躍もあって浅草で新たな花を咲かせる事に成功し幕末の動乱を乗り越えていったのです。

超高級おせち

巷には、「ブルガリ」のおせち４０万円や、「懐石小室」のおせち３０万円など超高級おせちが売れているのだとか。確かにブランド名が付くと、お高いのはわかりますが、「お重の大きさが何倍もあるわけでもないのに～」と悪態をつきつつも興味津々。笑

しかし「懐石小室」を販売する高島屋の担当者に聞くと「タケノコの煮もの一つとっても、当然、素材は国産で、かつ、産地が限定されたり、場合によっては生産者が限定される。カズノコは一般的な塩蔵した冷蔵のものではなく、北海道・前浜の『干し数の子』。それを水戻しして、ご主人の小室さんが味つけをして、おせち料理に仕立てていく等、ものすごく手間と時間がかかっている。」という事らしいのです。確かに量産もできないのでそれはそうかも？納得はしても、庶民には無縁の高嶺の花ですよね～。汗

懐石小室324,000円

尼崎・伝説の闇市

今も尼崎市内には多くの商店街が存在しますが、戦後、７カ所あったヤミ市場の中でも、特に三和市場の裏通りやドブ川に板をのせて商売をした「新三和市場」が最大の規模を誇りました。ちょうど阪神「出屋敷」あたりでしょうか。しかし元工員や引揚者、外国人など雑多な顔ぶれが軒を連ねた為、争いが絶えず、それを地元のや●ざ、高木組が睨みをきかせ収めていました。高木組は1946年にバラック100戸を建設、「三和復興市場」と名付けて発足。戦前からの三和市場も徐々に店を開け「阪神間の台所」へと発展していきます。

阪神間に先駆けて巨大ヤミ市が発展した背景について、三和復興市場会長をつとめた池田清一氏は、周辺に比べて取り締まりが緩やかだったと指摘。この池田氏、食料など統制下にあった当時、仲間とともに四国や明石などで魚を買い付け、夜中に陸揚げして小売業者に売りさばきました。遠くは京都からも買い手が集まって来たといいます。その繁昌ぶりは語り草となっていて、公務員の初任給が数千円であった昭和23年頃、池田氏の店の売り上げは1日10万円を下らなかったそう。また彼は、警察や高木組などともうまく折り合いをつけ、界隈で大きな力を持つようになっていきました。当時、尼崎市の行政復興が水害とインフレによる予算不足で停滞する一方、商店街や市場を舞台に、一般大衆による躍動感あふれる復興が、生き生きと展開され尼崎発展の大きなうねりとなって行ったのですね～。